

一 石火の機と云事有 是もはやき心持也 そ
つとも心をとめず其終取合候事をいふ也 石を
はたとうてば打といなやぴっかりと火の出るに
たとへ候也 心をとめて思案分別して取合せふ
とせばなるまひぞ 石の火のごとくするを石火
の機と云也 西行集の歌に
世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと
思ふ計ぞ

こころとむなと思ふ計ぞと云下の句を引合は
兵法の極意にあたり候也 心をとめぬが肝要也
禪宗にて如何是佛と問へば 問声の未だ絶へぬ
さきに手をはたと可打 又如何是禪と問へば爪
はじきもすべし 思案し何事を云ぞとしたらば
煩惱也 思案分別に不渡 血氣情識のはなれた
るそつとも留らぬ心を貴ぶ也 とまらぬ心は
色も香も移らぬ也 此移らぬ心の躰を神とも云
佛とも云 禪心とも云 佛心とも云 本来の面目

とも 祖師再来意とも 至極の意ともいふ也 思案して後に云候へば金言妙句にでも住地の煩惱也 何れの道にもとまらぬ心を專とする也 たとへ人を喚び候時 應と答へたる心は不動知と云也 其人が何の用にて可有ぞと思案して後に用ゆふかと云たは住地の煩惱也 我を喚れたる声に心が留りて心を動したる故也 何事にも心の動点せぬ様に着のなきを好とする事也 如此の禪機を兵法に取用てはたらき候はば そつとも留る所有まじき也